

くずれば、地形や地質からみてそれぞれのデータが全く同じであるところすべてに起こるはずなのになぜ部分的にしか発生しなかったのか」という意味の質問があった。しかし、期待した答えは返って来なかった。

話はわかるが、戦後、気象予報が当たらないのは計算機がないから……ということでは気象庁に東洋一の計算機が入った。しかし予報の結果は変らなかつた。それで富士山レーダーがあれば……ということでは富士山頂に東洋一のレーダーが据付けられ広範囲の情報が入手できるようになった。予報はそれまでと大差はなかつた。次に気象衛星があれば……ということになった。その結果は御承知の「台風は予想外の進路をたどり……」。

昭和61年11月に大島の三原山が噴火し、日本列島が注目した。次々と発表される噴火予知の結果は、島民の期待に沿わず国民を落胆させることになった。日本で最も火山観測機器の揃っている三原山の話である。それで噴火予知が充分できないのは測定機器が不足しているから……ということでは多額の予算がついて新しい機器が設置された。補充された機器が動きはじめた昭和62年1月、割れ目噴火の可能性ありとの警報が出され、島民の危機感をあおった。しかし、警報は二週間経たないうちに解除された。

以上が現代自然科学の最先端の状態である。心寒いものがある。その共通とするところは、自然現象の観察が不十分であるということに盡きよう。科学者が自然現象に対する認識の問題がここに現われている。崖くずれば地域によって「繰返し特性」があり、この性格には過去から現在に至る「地形の生い立ち」をつくった地域の習性が潜んでいるのである。これを悟……というらないと崖くずれの予測は難しい。したがって絶えず造型的な立場からの観察が必要となってくる。

気象予報にも同じことがいえる。第2次大戦中、気象将校として作戦に参加した経験では、人間が「命をかけ

た予報」の確率は大きかったということである。「明朝の時を期して〇〇に爆撃を敢行せんとす。気象班長の判断如何……」と参謀から問われたとき、現在の予報状態では当面の急務に間に合わない。気象機器のデータに頼りきって、充分な観天望気（航空機からの観測を含む）の裏付けのない予報は意味がないのである。

とくに火山では、「生態学」的観察が重要となる。地球上それぞれの地域にある火山活動は、その地域を特徴づけるような活動を行っている。三原山には三原山の「火山生態学」——このような専門語はまだ生れていない——があるはず、文献の中の火山常識のみで、眼前に起こっている火山現象を判断しようとする態度は科学的とはいえない。ぼう大な文献を抱えていては知識は常に文献の後追いとなることもあり得る。

噴火口に近づき熱い岩片や火山灰や熱風を受けながら観察することもせず、デスクワーク中心の学者に噴火予知ができるはずがない……と考える学者も大勢いる。アルン・タジェフの真似をしるとはいわぬがせめて行動力だけでも……。

自然現象の予知、予測は難しいことに違いない。いかに精密機器であろうと大自然の前には蟻螂の斧である。測定器の針の動きやデジタル表示は人間の頭の程度を現わしているのもあって、自然の動きをすべて伝えるものではないのである。測定機類のデータは常に実際の現象と照合しエラーをチェックする。そして測定器の習性をよく知っておくことが肝要であることに無関心な人が多い。

絶えざる観察こそが自然の生態を知り得る最良の方法であることを忘れてはいまいか。「観察の裏付けのない定量的表現は無意味である」という自然科学の大原則を忘れてはいまいか。それ故、私の担当する学科では野外実習により厳しい観察を課している。

(千葉大学)

ユートピア

西川 治

税制改革とやらで、マル優がどうなるか、年金生活者の一人として気になるころだが、「もし優がとれなければ不可にして下さい」との注文をつけた答案用紙が現れると、やはり面白くなかった。

まさか成績を気にする人がその語原ではあるまい

に、優という字を分解すれば、なるほど人が憂えるともよめる。夕ぐれの窓辺でひとり静かに憂いにふける乙女の姿には優にやさしい風情もあるが、ろくな回答もできないくせに、優を暗にねだるような人でなしには、ただ●とでもつけたいと思った。それでは教務あたり

から、近ごろ優の字も書けない先生がいるなどと笑いのものにされたら大変なので、まだ実行したことはない。

しかし考えてみれば、この世はまさに憂トピア、受験生はいうに及ばず、教官の方も出題や採点ばかりか、入試制度が変更されるたびに、膨大な時間を奪われる。退官して何が一番嬉しかったかといえ、そんな業務から解放されたことである。

おかげで少しは暇もできたので、老いの身空もかえりみず、わがユートピア物語を書いてみる気になったのである。その動機は大人げないが、先日ふとテレビをつけたら、著名な評論家が、「房総半島に運河を掘り、その土で東京湾を埋めたてよ」とのたもうた。「なんだ今さら、我輩はもう20年以上も前に、日本地域開発センターの研究会で提唱したことがあるぞ」と家内に言っても、てんで相手にされなかった。やはりどこかにちょっとでも書いておけばよかった。級友の高崎正義君なら、「お前はロマンチストだから、そんなことも言ってたかもしれない」と慰めてくれたかもしれない。その当時、ちゃんと五万分の1の地形図で、集落のない帯状の適地をあたり、掘り出した土砂で九十九里の遠浅海岸を埋め立て、飛行場と工業地帯や海上公園を作りそれによって東京湾の水もきれいになるし、出入する船舶の衝突事故もへるであろうと空想したものである。だが、鹿島臨海工業地帯の造成費をはるかに上まわる、そんなプロジェクトは誰も本気にしてくれなかった。今では地価は上がったし、補償問題もいっそう厄介だし、なお当分は夢物語にとどまるであろう。

それから約10年後の1972年にストックホルムで、国連主催の第一回人間環境会議が開かれた。それに先立ち担当事務局長は、各国の諸機関に6項目の議題について予め意見を求めた。これをうけて日本地域開発センターにも、「環境問題提言委員会」が設けられ、私も

そのメンバーに加えていただいた。その時、多少テレながら提案した内容は、1975年の小論に記し、ついでUP選書「地球人の環境」(1977)にも再録してしまった。いままたその中から、再度提言したい夢がある。すなわち、太平洋中の比較的大きな未開の島に“Geotopia”を建設し、そこに国連諸機関を集中する。そこには大規模な国際孤児院をつくり、戦災孤児たちを最初の固有市民として、その中からできるだけ多くの国連職員も採用する。この都市には、国際空港・港湾はもとより、レポート、国連大学、国際会議場、人類文化大博物館、地球博物館なども設置される。このマスタープランは国際コンペによって選ばれるが、そのさいプランには世界の主な村落や都市の類型を織り込み、また史上すぐれたユートピア計画も、なるべく多く反映させることが必要条件となる。建設資金には、各国のGNPに一定の比率をかけた年額を、長期間積み立てる。ジェオトピアの初期人口は100万、将来1,000万程度まで拡大の余地を残す。E.ハワードの故知にならって、土地の地代は国連の自主財源となる。これより詳しいことは上記著書にゆずるが、当初私はこの「地球人間都市」のオープニングセレモニーは、2001年に予定していた。しかしもう間に合いそうにもない。せめて、西暦は20世紀までで終りにして、新世紀は「地球暦」元年として迎えよう！ 欧化の歴史に幕を下して、個性あふれる民族模様がその美を競い合う、新しい世界を開こうではないか。その実現に向けて、「地図文化博物館」や「国際地域情報センター」の建設推進運動に努力している昨今である。どうかこの憂トピア運動費のためにも、マル優をつづけて下さい。(もし優がとれなければ、SDIを不可にして下さい。)

(立正大学)

武蔵野の自然

宮 脇 昭

武蔵野台地に代表される東京の植物的自然は、すでに文学的にも徳富蘆花の“自然と人生”や国木田独歩の“武蔵野”にとりあげられている雑木林と考えられていた。たしかに春4月から5月はじめにかけて日毎にねずみ色から浅黄、萌黄色さらに目の覚めるような新緑へと装いを改めてゆくクヌギ・コナラ林は美しい自然

に見える。また濃緑の夏から黄葉し、晩秋の木枯しに落葉して、青い冬の空に梢が突きささるような荒涼とした樹木も武蔵野の季観として、田園景観を特徴づけている。

しかし、未だ残されている静かな冬の雑木林の中を落葉を踏みしめながら散策すると、夏とは全く異った